若者たちの壮大な夢を追う

創立記念日（9月16日）特集

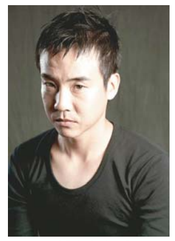
本紙5・6月号で撮影状況を掲載した創立130周年記念映画「学校をつくろう　その時、若者たちは未来を見た」（神山征二郎監督）は、6月初旬にクランクアップし、このほど編集・音楽などすべての作業を終え、完成した。

創立記念日特集として、撮影時の写真とともにストーリーの概略をお伝えしよう。

上映については決定次第、本紙ならびにホームページに掲載します

創立130周年記念映画完成!!
学校をつくろう
―その時、若者たちは未来を見た―

相馬永胤役の三浦貴大さん


田尻稲次郎役の池上リョヲマさん

目賀田種太郎役の橋本一郎さん

駒井重格役の柄本時生さん

留学前
新時代を見据えて相馬、渡米を決意

戊辰戦争で奮闘した彦根藩士・相馬信一郎（永胤）は新時代を見据え、我が国の急務は、強兵であると考えていた。明治3（1870）年春、大阪陸軍兵学校の試験を受けたが、惜しくも不合格となる。西洋文明をもてはやす風潮を嫌う相馬は、薩摩藩の西郷隆盛（永島敏行さん）に許可を求め、相馬の熱意に動かされた谷大参事の許可を得て、明治4（1871）年7月、彦根藩を出発する。

▲　永島敏行さん

▶　尾崎英二郎さん（左）

と勧める。英語がまったくできない相馬だったが、彦根藩大参事の谷鉄臣（尾崎英二郎さん）平3経済）に許可を求め、相と訴れる。日本の未来は、若者の双肩にかかっていると期待する西郷は「兵学を学ぶには留学するべし」

やむなく一時帰国、再渡米
相馬、目賀田と出会い、意気投合

サンフランシスコに到着した相馬は、ドクター・カール教授の家に下宿し、英語の特訓を受ける。希望していた陸軍士官学校への入学はかなわず、法律か経済を学ぼうと決意し、大学入学準備のため猛勉強する。しかし、視力が弱まり、読書もできなくなってしまう。専門科に進んでいないものは学費を停止する、帰国せよとの通知が届き、労賃が支給される農てもらい再渡米した相馬は、御三卿清水家の当主、清水篤守（徳川慶喜の弟）の学校に入るが、学費の工面ができず、明治6（1873）年末、再び渡米し、ヒークスキルアカデミーを席次5番という優秀な成績で卒業。明治8（1875）年、コロンビア大学に入り、江木高明（後に帝国大学法科大学教授を兼任。日本初の法学博士の学位を得る。

大蔵省銀行局長を経て、主税局長、貴族院議員、大蔵次官、大蔵総務長官を経て会計検査院長などすべての作業を終え、完成した。

創立記念日特集として、撮影時の写真とともにストーリーの概略をお伝えしよう。

上映については決定次第、本紙ならびにホームページに掲載します

「日本法律会社」設立
日本語で教える学校をつくろう

英語による模擬裁判を活発に開く相馬たちだが、近代日本をつくるには国際的な法律知識を持つ人材の育成が必要だと感じるようになる。明治9（1876）年、相馬、目賀田、三浦、江木、清水らは日本法律会社を発足。初代社長には三浦が就任し、日本へ帰ってから日本語で法律を教える学校をつくろうと意見がまとまった。

相馬、三浦はコロンビア大学を優秀な成績で卒業し、さらにエール大学大学院へ進学。薩摩藩出身の田尻稲次郎は、エール大学文科を卒業、大学院に進学していた。相馬は日本語で経済も教える必要があると考え、田尻と駒井を引き合わせる。彼らは日本語の教科書を作るため、翻訳作業に没頭する。

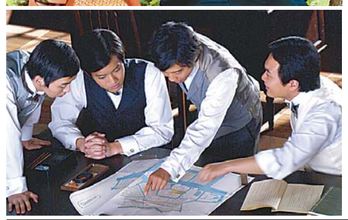
帰国後
開業広告で生徒募集「専修学校」設立に奔走

明治12（1879）年8月、田尻と駒井が帰国、相馬と目賀田は9月に帰国した。相馬は祖母のもとを訪れ、帰国の報告をする。そこに目賀田から法律事務所に手ごろな物件が見つかったと手紙が届いた。

その事務所を拠点に「専修学校」設立の準備が進んでいく。学校開設前に、慶應義塾の福沢諭吉の協力を得て昼間の授業後に夜間、場所を借りて教えることとなった。

相馬と目賀田は司法省附属代言人に任命され、本格的に活動を始める。目賀田は勝海舟の三女・逸子と結婚。相馬も陸軍の校舎も見つかり、私立婚約し、エンゲージリングを取り交わす。

学校開業上申書を提出し、生徒を募集。そして相馬らは、開業広告を出し、明治13（1880）年9月16日の開校入学式を迎え……。



相馬 永胤（そうま・ながたね）

彦根藩の武勇の家に生まれた相馬永胤（1850～1924）は、動乱のなか初志を貫いた不屈の行動家。のちに銀行家として不動の地位を築きながら専修大学の発展に最後まで力を尽くした。

明治4（1871）年、新政府の命による彦根藩からの欧米視察員に選抜され、米国に旅立った。その後、思わぬ帰国から再渡米、失明寸前の眼病にかかるなど異国での数々の困難や危機を乗り越え、コロンビア大学を卒業。さらにエール大学院で経済学を修めた。

不屈の志で米留学 専修学校初代校長

法学徒のクラブ「日本法律会社」を設立。これが専修学校誕生の土台となった。さらにさまざまな専門分野の留学生と共に幅広い学術分野のクラブ「興学社」を結成。留学中、終生の同志となる目賀田種太郎、田尻稲次郎、駒井重格らと出会い、親交を深めることにより、法学徒と経済学徒の二つの輪が結ばれた。

帰国後、司法省附属代言人（弁護士）に。田尻、目賀田、駒井らと共に専修学校創立に情熱を傾け、米国留学時の仲間の協力を得て念願の専修学校を設立。法律科で教授。「貿易法」「海上法」「保険法」「流通証書法」「米国訴訟法」などを担当した。

学外では横浜始審裁判所判事などを務め、横浜正金銀行官選取締役となる。ロンドン支店の開設に尽力し、国内外で活躍、同銀行の頭取を務めた。第1回衆議院議員選挙に当選。

この間も専修学校の教壇に立ち、初代校長を務めた。高等商業学校（現・一橋大学）でも法律を講義。「私立専修大学」改称と同時に学長に就任。大学令公布により大学に認可された大正11（1922）年、文部省は学制頒布50年記念祝典の際し、相馬と田尻を教育功労者として表彰した。

大正12年の関東大震災では、自宅に仮事務所を設けて復興事業を指揮。授業が再開された矢先の13年1月26日に死去。著書に『英米売買法』『米国訴訟法』などがある。

田尻 稲次郎（たじり・いなじろう）

財政学の権威として明治から大正にかけて活躍した経済学者の田尻稲次郎（1850～1923）は、教育者としても専修大学に最後まで尽くした。

薩摩藩京都上屋敷に藩士の三男として生まれた。洋学を学び、長崎に遊学した後、上京。慶應義塾、開成所、海軍兵学寮、大学南校に学び、刑部省から留学を命ぜられ、明治4（1871）年、アメリカの土を踏んだ。エール大学で経済学、財政学を学び学位を得て、引き続き同大学大学院に学んだ。

相馬とは「興学社」をおこした。質素を旨とし衣服にかまわぬ姿を、友人たちから「きたなり」（田尻の号は北雷）と親しみをこめて呼ばれた逸話がある。

財政学の第一人者 日曜日も講義持つ

明治12（1879）年に帰国し翌年、専修学校は財政学の知識を高く買われた。後に帝国大学法科大学教授を兼任。日本初の法学博士の学位を得る。

大蔵省銀行局長を経て、主税局長、貴族院議員、大蔵次官、大蔵総務長官を経て会計検査院長、帝国学士院会員。さらに子爵となる。会計検査院長を退くと東京市長に就任、政治の分野でも活躍した。専修大学の学監を務めた。

経済科の教科書に用いた田尻の訳書には英・マクラウドの『銀行史』、同・ゼボンの『貨幣論』、仏・ポリューの『財政論』などがあり、当代随一と評された。

東京市長在職時も専修大学で日曜日に講義（補講）を持った。平日に授業に出られない、働く若者たちのためを思ってのことである。要職についてからも教育現場から離れず、生徒に教える労を惜しまない姿勢は多くの長官を経て会計検査院子弟に慕われた。

目賀田 種太郎（めがた・たねたろう）

目賀田種太郎（1853～1926）は、幼少から漢学を学び、英語、数学を修めた。英才の誉れ高く、大学南校に入学。新政府により米国留学生に選ばれ、明治3年（1870）、17歳で米国に渡る。

ハーバード大学で一般法学の大意、国法学を学び、とりわけ国際公法の研究に意欲を燃やす。同校を卒業し学位を得て帰国した。

日本に戻った目賀田は同8年（1875）、留学生監督を命ぜられ、成学校の生徒を引き連れて再渡米。自らも法学の研究を深めた。

ニューヨークで、相馬らとともに「日本法律会社」を結成。頻繁に将来の計画を話し合った。

帰国後、目賀田は相馬と行動を共にし、司法省附属代言人となるかたわら、専修学校設立の準備にあたった。

専修学校創立後、目賀田は相馬と共に日本語による法律講義を始めた。

担当は「訴訟演習」「私訴犯法」「弁論科」など。「私訴犯法」は『維馬法典』を教科書に用いた。

渡米2回研鑽積む 盟友追悼会で演説

卒業式では、米国の慣行にならい、卒業生が演説を行ったが、その指導にあたった。

大正13年（1924）に催された相馬、田尻の追悼会では、病をおして出席。盟友をしのぶ辞を贈った。その2年後に他界。目賀田夫人・逸子と再渡米中に伊沢修二（東京音楽学校＝現・東京芸術大学＝初代校長）と出会い、日本の音楽唱歌を欧米の音楽と同化させようと共に研究、音楽教育の発展にも貢献した。

米留学、専修学校を開学
創立者4人の横顔

専修大学は、前身である専修学校として明治13（1880）年9月16日に誕生した。日本で初めて経済、法律の専門教育課程を日本語で授ける専門学校として開学。主な創立者である相馬永胤、目賀田種太郎、駒井重格の4人は、留学中のアメリカで出会い、新時代を担う人材を育てて母国の発展に寄与しようと志を一にしたのだ。いずれも10代、20代で渡米、創立時は26代から30歳までの若さだった。4人はその後、社会で目覚ましい活躍を遂げる一方、専修学校の教壇に立ち、生徒の育成に尽力、専修学校の社会的地位を高めることに努めた。4人の足跡をたどってみよう。

（参考文献『専修大学百年史』）

駒井 重格（こまい・しげただ）

駒井重格（1853～1901）は、専修学校、高等商業学校（現・一橋大学）などで次代を担う若者の教育に尽力した。留学中に学んだ英語、フランス語に堪能で、フランス経済学を日本に導入。近代日本における経済学の先駆者である。

桑名藩士の家に生まれ、14歳で家督を継ぎ、戊辰戦争に参戦。北陸・東北地方を転戦した。

英語・仏語に堪能 著書・翻訳書多数

その後、旧桑名藩主・松平定教のアメリカ留学に随行し、ラトガース大学で、「外国為換」「予算論」「経済考徴」などを担当した。駒井の翻訳教科書に英・ホーセットの『自由保護貿易論』、同・ゲーシェンの『外国為換論』、仏・ポリュー『歳計予算論』、英・ケアンズの『経済要論』などがあり、いずれも高く評価された。ポリュー『財政論』については、駒井・閲、田尻・訳となっている。

開校の翌年の第1回卒業式では、卒業生11人に卒業証書を手渡す大役を担った。のちに大蔵省入りし、国債局長兼大蔵参事官に昇進した。

東京大学予備門や岡山中学校（現・岡山県立岡山朝日高等学校）や岡山師範学校（現・岡山大学）、高等商業学校などでも英語や経済学を教えた。

校長を務めた高等商業学校では名校長と慕われ、校長の要職のまま死去。48歳の若さだった。

渡米4年の留学期間中に、田尻稲次郎や相馬永胤、目賀田種太郎らと知り合い、友情を深め、学校創立について話し合った。

駒井は「もっぱら経済科で学で経済学を学ぶ。

明治12年（1879）、帰国。特に田尻との友情は終生続き、帰国時、田尻の粗末な服装をみかね、自ら新調した背広を田尻に贈ったというエピソードがある。

専修学校を開校すると駒井はもっぱら経済科で担当した。駒井の翻訳教科書に英・ホーセットの『自由保護貿易論』、同・ゲーシェンの『外国為換論』、仏・ポリュー『歳計予算論』、英・ケアン